25

武見太郎の描いたわが国の未来社会
――昭和30年の「中央公論」論文から――

丸井　英二[1)]，杉田　　聡[2)]，田中　誠二[3)]
[1)] 人間総合科学大学，[2)] 大分大学医学部，[3)] 新潟大学人文社会 教育科学系

【はじめに】本報告では，武見太郎（1904–1983）を取り上げる．一般的には「戦後日本の医療界のドン」と呼ばれ，日本医師会長を25年という長期にわたってつとめた人物としてのみ知られている．しかし，世間に知られている政治的活動とは異なる側面をもつ人物であり，その思想性と先見性を再検討する．数多くある彼の著作から，昭和30年および昭和40年の著作を紹介し，わが国の医学と医療について歴史と未来を考える手がかりとしたい．

【背景】日本医師会長として25年間にわたりわが国の医療の方向づけを行っていた武見太郎は，生前，「未来からの反射」という言葉をよくつかった．E.H. カーのいう「歴史とは過去と現代との絶えざる対話である」という簡略な定義がある．これを未来に延長すると，おそらくは現在の意思決定をおこなう根拠は将来像を想定した上での「未来からの反射」にもとづく，ということになろう．後ろ向きではなく，前向きの歴史考察ということになる．

昭和30年3月号の「中央公論」に武見太郎氏が『老人の増加にどう対処するか』という論文を寄稿している．このとき，彼はGHQとの対立から日本医師会の田宮猛雄会長とともに副会長を辞していた．その後，昭和32年に日本医師会長となり，四半世紀にわたり活躍する．その狭間の時期である．

また，昭和30年という時期は，ようやく戦後を脱却しはじめる時期でもあり，ベビーブーマーがようやく小学校に入学した時期でもある．子どもが多いこの時期に，わが国の将来の高齢社会化をエビデンスをもって提示し，懸念をつよく表明していたことは特筆に値する．

【資料】昭和30年3月号「中央公論」掲載の『老人の増加にどう対処するか』ならびに，昭和40年12月日本テレビでの一般向け放送の記録，その他の関連資料．

【結果ならびに考察】彼は（昭和30年からみた）20年後のわが国の人口構成の予測を引用したうえで，「今日わが国においては，社会保障の諸傾向は，過去と現在との要請に応ずるに急であって，到底10年，20年後の社会的事実を勘案するに至っていない」．さらに「すべての社会保障は老人学による施策を怠ることによって全機能を停止することが予想される」ところから議論を開始する．

1.（老年医学でなく）老年学をアメリカの文献から紹介し，2. わが国の将来の高齢化について言及し，「老齢人口の成立は，主として乳幼児死亡の減少と生命の延長とからなるものである」ことを指摘している．3.「老齢人口の問題は質と量との2面において考慮しなければならないが，この両者は不可分のものである」そして，4.「人口構成の変化は医療保険の量の問題であるが，疾病と医療は質の問題であり，両者をかけ合わせたものが医療社会保険の規模でなければならない」と，将来的な医療保険維持の危機を懸念している．

また，10年後の昭和40年の日本テレビでの放送の記録では，さらに踏み込んで，昭和90年には老人（60歳以上）は3000万人になるという予測を引用したうえで，成人病対策を中心に語る．成人病対策は乳幼児期から始めること，健康教育と精神衛生を重視し，予防的健康管理を整備し，「老人病は地域で解決を」と述べる．最後に，今後の目標として，「1. 労働可能年齢の延長，2. 年齢層別健康度の増進，3. 健全な社会的機能の向上」を挙げている．

【結語】武見は将来のわが国の高齢化をいち早く見通し，かつ強く懸念していたことは，同時代人の中でも稀である．彼の表面的な医師会長としての政治的役割の基底にはそうした将来展望と慧眼とがあった．